

インタラクティブ空間演習 (女子美術大学大学院)

「創造の可能性」統辞クラスと意味特徴の作用から

3章 「3. 記号と統辞」 pp.148-159 (2014-11-19)

池上嘉彦 著「III. 創る意味と創られる意味—意味作用をめぐる—」、「記号論への招待」

担当: 石井 拓洋  
ishii05042@venus.joshibi.jp

2014

「コードにおける『意味論』的な規定と『統辞論』的な規定 pp.123 - 124

【記号論の3つの分野】 (前回)

- 意味論 semantics  
「記号」とその「指示物」の関係について
- 統辞論 syntactics  
「記号」と「記号」との結合について (統語論、構文論とも)
- 実用論 pragmatics  
「記号」とその「使用者」の関係について (行為論とも)

※ それぞれの出典: W.モリス『記号理論の基礎』(1938) C.S.パースの弟子. (池上, 45)

『範例的』と『統辞的』 pp.145 - 147 (前回)

(池上, 147)

※ 用語の確認

- 「意味的特徴」とは
  - ※ ある語のもつ抽象的な意味
  - 「ジョン、ビル、マリーの三項から成るから〈人間〉という意味特徴」 (池上, 148)
- 「統辞単位」とは
  - ※ 「記号」の配列を規定する統辞規定によって生み出された複数の記号による〈かたまり〉のこと。
  - ※ 例えば、主語+述語からなる「節」、または「句」など。

「統辞クラスの意味的基盤」 pp.148 - 149

【「理想的な」統辞規定とは】 (※ 言語の表現性からいえば「理想的」ではないが)

- 「統辞クラス」内で、各クラスに属する語の「意味特徴」が一致していること

(池上, 148)

「統辞クラスの意味的基盤」 pp.148 - 149

【一方、「理想的な」統辞、その非現実性】

- 「理想的な」統辞とは、〈意味特徴〉が少ない記号体系でしか実現しない = 伝達可能な範囲が狭い。

「統辞クラスの意味的基盤」 pp.148 - 149 (池上, 149)

【統辞と意味をめぐるディレンマ】 dilemma (=どちらもダメの構造)

伝達可能な情報は、  
広範囲でありたい

↓

その記号体系が用意する  
「意味特徴」の量や範囲がふえる

↓

「意味特徴」の数だけの  
膨大な数の統辞規則が必要

複雑すぎてダメ ❌

統辞は複雑すぎない  
ものでありたい

↓

その記号体系が用意する  
「意味特徴」の量や範囲が減る

↓

伝達可能な情報が、  
狭い。

表現力がなくてダメ ❌

「統辞クラスの意味的基盤」 pp.148 - 149

〈表現力が豊か〉で〈統辞規則が簡単〉な、都合の良い記号体系をつくるためには？

【統辞のディレンマを回避するための2つ】 (※ この後で説明する)

- 1. 統辞上の「選択制限」をする  
→ 統辞クラス規定における意味特徴の関与を限定する方法
- 2. 統辞と意味との「緩やかな」対応関係をつくる  
→ 統辞クラスと意味特徴との対応関係の柔軟性

(池上, 149)

「意味的選択制限」 pp.150 - 152 (池上, 150)

〈表現力が豊か〉で〈統辞規則が簡単〉な、都合の良い記号体系をつくるための方法 1

【1. 統辞上の「選択制限」をする方法】

- ある語が「選択制限」を有するとは？
  - 例えば〈人間〉という「意味特徴」には、人間にこそ適用される〈動詞〉群をまとめあげる(「泣く」・「思う」・「愛する」など)。
  - このような働きを「選択制限」という。
  - 〈人間〉には選択制限がある。〈校長〉には独自の選択制限がない(池上, 150)
- 「選択制限」のある単語と、無い単語をもうけることで、「意味特徴」の数に対する、統辞規則の数の抑制が可能。

「意味的選択制限」 pp.150 - 152

【「選択制限」の例】

意味特徴 〈人間〉  
(「ジョン」・「ビル」・「マリー」など)

→

「泣く」 ○

「思う」 ○

「愛する」 ○

「氣化する」 ×

意味特徴 = 〈人間〉がもつ動詞に対する「選択制限」

意味特徴 〈校長〉  
(「ジョン」・「ビル」・「マリー」など)

→

意味特徴 = 〈人間〉が「選択制限」する動詞群とほぼ同じ

= 意味特徴の数に対して、統辞規定の数が抑制された

意味特徴 = 〈校長〉が〈独自に〉もつ動詞に対する「選択制限」はほぼない。

「意味的選択制限」 pp.150 - 152 (池上, 151)

【「選択制限」の作用がおきる単語の特徴 その1】

- 「一般的」な概念内容をもつ意味特徴の語には、選択制限がみられる。
  - 〈人間〉、〈生物〉、〈植物〉、〈物質〉など抽象度が高い「意味特徴」
- 「個別具体的」な意味特徴の語には、選択制限がみられず、既成の選択制限が適用される。
  - 〈校長〉、〈白猫〉、〈松〉、〈水〉など、抽象度が低い語
  - 〈校長〉 → 〈人間〉として、〈人間〉の「選択制限」を適用、、、など。

「意味的選択制限」 pp.150 - 152 (池上, 151)

【「選択制限」の作用がおきる単語の特徴 その2】

- 個別具体的だが「文化的に特別な『価値付け』をもつ語」
 

意味特徴 〈天皇〉

→

「行幸する」

意味特徴 = 〈天皇〉のみが使用する動詞。動詞に対する「選択制限」あり。

  - 「行幸する」：(動詞) 天皇が外出すること。まさに天皇にのみ使用可能な動詞。ちなみに、皇后や皇太子が外出することは「行啓する」となる。
  - ※ 〈天皇〉は〈特に注目される存在〉であることから、他の人とは区別すべしとする、日本の「文化的な『価値付け』」の現れ

「統辞的規範としての『品詞』と意味特徴」 pp.152 - 153

〈表現力が豊か〉で〈統辞規則が簡単〉な、都合のよい記号体系をつくるための方法 2

【2. 統辞と意味との「緩やかな」対応関係をつくる方法】  
= ※いわば「選択制限」の不徹底の方法。

- 「品詞」に属することが可能な意味特徴の規定を緩和する

(主語)	(述語)
「名詞」	「動詞」
(人間)、(動物) (植物)、(鉱物)など、	(座る)、(冬眠する) (発芽する)、(行幸する)など、

- 「選択制限」を徹底せず、「選択制限」同士の相互使用を許すことで、「意味特徴」の数に対する、統辞規則の数の抑制が可能。

→ 例：「太郎が行幸する」 〈人間〉と〈天皇〉の意味特徴による「選択制限」の緩和。本来は不成立な文。しかし、新たな意味合いで成立。

「統辞的規範としての『品詞』と意味特徴」 pp.152 - 153

【主語に用いられる名詞。そこに属する単語に共有する意味はあるか？】

主語の「名詞」

- ・「太郎が歩く」 : 主語の名詞 = 意味特徴 〈人間〉
- ・「犬が走る」 : 主語の名詞 = 意味特徴 〈動物〉
- ・「木が茂る」 : 主語の名詞 = 意味特徴 〈植物〉
- ・「石が転がる」 : 主語の名詞 = 意味特徴 〈無生〉(池上, 152)

共有する意味はあるか？

→ 厳密には無い。しかし、「ゆるやか」に共有された意味がある。

→ 〈人間〉という「意味特徴」を有するものが主語として現れるのが本来的とする感覚がある。〈人間〉以外は、その派生的な表現とする感覚がある。

「統辞的規範としての『品詞』と意味特徴」 pp.152 - 153 (池上, 153)

【主語としての名詞にうまれる、「人間的」な意志的な力の意味合い】

- 「木が茂る」
  - 本来は、〈人間〉なる語が位置すべき「主語」の部分に、「木」(意味特徴 = 〈植物〉) が位置している。
  - このことで、「木」の語の意味に、人間的な意志の力が存在する印象が付与
- 「山がそびえる」
  - 本来は、〈人間〉なる語が位置すべき「主語」の部分に、「山」(意味特徴 = 〈無生物〉?) が位置している。
  - このことで、「山」の語の意味に、人間的な意志の力が存在する印象が付与

「統辞的規範としての『品詞』と意味特徴」 pp.152 - 153

【統辞クラスと意味特徴との間には、意味特徴に基づく対応が相対的に優位に立つ】

主語の「名詞」

- ・「太郎が歩く」 : 主語の名詞 = 意味特徴 〈人間〉
- ・「犬が走る」 : 主語の名詞 = 意味特徴 〈動物〉
- ・「木が茂る」 : 主語の名詞 = 意味特徴 〈植物〉
- ・「石が転がる」 : 主語の名詞 = 意味特徴 〈無生〉(池上, 152)

「統辞クラスと意味特徴との間には完全な相関関係も完全な無関係も存在しないが、(しかし、ある意味特徴 (= 〈人間〉) との対応が相対的に(統辞クラスに対して) 優位に立つということはある」 (池上, 153)

※ 〈内容から形式がうまれる〉こと、その逆じゃないこと論拠として着目したい。

「創造の可能性」 pp.153 - 155 (池上, 154 f.)

【「太郎が行幸する」にみる「開かれた創造」の事例】

- 「太郎が行幸する」 太郎

- 〈人間〉と〈天皇〉の意味特徴による「選択制限」の緩和の例
- 本来は不成立な文。しかし、言語の記号体系は、この使用も成立させる。
- 成立させるのは、人間の主体的な意味補正への働きかけ。
- 「行幸する」に新たな意味合いが生まれて成立する。
- 本来は不適切な位置にあるはずの「太郎」だが、「天皇」のような意味をおびる。  
→ この「太郎」の「天皇」的意味付与こそ「比喩」の仕組み
- この場合、本来は皆に注目される存在ではないはずの太郎への皮肉な文脈となる

「創造の可能性」 pp.153 - 155

【「ゆるやか」さに基づく、言語の「開かれた創造」の可能性】

「統辞コードの規定に意味特徴が一見中途半端とも見える形で『緩やか』に関与しているということは、言語コードに開かれた創造の可能性を与えているものとして積極的に評価することができるはずである」

※「太郎の行幸、花子の行啓」のような図  
創造された「虚の世界」( = ※ 物語の世界)

(池上, 155)

「『イディオム』現象」 pp.155 - 159 (池上, 156)

【統辞規定が明確な記号体系、不明確な記号体系】

- ・ 統辞規定が「明確な」記号体系とは？
  - 日本語や中国語のような記号体系
  - 文 (統辞的単位) と、単語 (個々の記号) との区別が明瞭
  - 「本を読む」= 「本」(名詞) + 「を」(助詞) + 読む (動詞)
- ・ 統辞規定が「不明確な」記号体系とは？
  - 抽象画など
  - 点や線がそれぞれ一つの「記号 = 単語」なのか？、組み合わせの単位は？
  - 絵全体が一つの「記号 = 単語」なのか？
  - 部分と全体の区別が曖昧



「『イディオム』現象」 pp.155 - 159 (池上, 157)

【統辞規定が明確な記号体系は「高次の複合的まとまり」がうまれる】

・ 表示義は、個々の単語の意味をふまえて、その複合としての意味(「斬首」)

・ 共示義は、個々の単語の複合では引き出せない高次の意味(「解雇」)

統辞的連鎖全体が、新たな一つの記号(単語)となる = 「イディオム」 idiom

「『イディオム』現象」 pp.155 - 159 (池上, 158)

【イディオム現象】

イディオム化は、この本来共示義であったものももとの表示義を追放して  
それ自身が表示義の地位を占めるに至った時に完了する

「『イディオム』現象」 pp.155 - 159

【様々なレベルでのイディオム現象】

- ・ 単語レベルでの「イディオム」現象
  - 「親切」は本来「深切」(文字通りの意味 = 表示義)
  - <深く切ること = (表示義) > → <身にしみる行い > → <思いやりのある行い = (共示義) >
  - <思いやりのある行い = (共示義) > が、文字通りの意味 (表示義) となった。
- ・ テクストレベルでの「イディオム」現象
  - 「テキスト」= 文が集まってできた、より大きな統辞単位 (※ 次節で定義される)
  - 文学である一節全体が特別な意味合い(共示義)を持たされている現象
  - その部分の文字通りの意味 (表示義) は分かるが、本当は何を主張しているのか不明な部分
  - ※ 例) マタイによる福音書、第25章14節「タラントンのたとえ」など

[http://www.youtube.com/watch?v=kSauml\\_VQ-U](http://www.youtube.com/watch?v=kSauml_VQ-U)